

脱ぎ捨てて

箱森裕美

- 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
- 真鱈は光の束や切り開く
 秋澄みて昔の写真よく燃える
 剥くときの桃の小さき呼吸かな
 みそはぎの吹かるるや椅子折りたたむ
 秋薔薇の数多そのすべてに触れず
 ただ月の白さ言ひ交はしてゐたり
 秋の田を茫と映してゐる列車
 小鳥来る郵便局の上に家
 野分だつ鏡中に人いだかれて
 秋雨に積むブロックやどれも赤
 紅葉且つ散るはじまりを違へたる
 綿飴の徐々に大きくなる小春
 泣くための昔話よ冬苺
 作業着を振りて寒靄落としけり
 マネキンのあれは左手冬の浜
 叩き出すコーンの粒やかいつぶり
 寒夕焼人体模型無毛なる
 柚子湯してもう戻れない縁かな
 果実酒の果実浮きたり冬館
 さむいから昔の呼び方で呼べよ
 鯛焼を食みてしづかに湿り合ふ
 息深きところに鎮座する冬野
 待春や体育館で見る映画
 春の雪ふとあらはるる片ゑくぼ
 紅梅白梅遠くで橋の崩れるよ
- 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26
- 初蝶は九分九厘まで粉であり
 春眠やコップの中に水濁る
 歯車が春を冷やしてをりにけり
 みじんこのしんしんと湧く春休み
 諫言の声うつくしや蝶の昼
 木の瘤に水気ありけり卒業期
 また出会ふ別の花吹雪のなかで
 指は三つ編みを続ける立夏かな
 葉桜の最中をさなくなつてゐる
 目高の群ひるがへりを糞もまた
 噴水の果ててこれから先は夜
 ゆるやかに蛭の淀みの乾きけり
 十葉やさみしき人の肥えはじむ
 ぬひぐるみまとめて縛る夏野かな
 嘘つくは楽し白玉よく冷えし
 エレベーター停まる階から黴になる
 まなうらに紫陽花満ちる死の話
 てんじやうがとともとほくてところてん
 百日紅棄てるものなくなり拝む
 8×4（エイトフォー）みんなで回すサイダーも
 うすばかげろふアパートに集ふ靴
 蝉鳴いて全山深く暮れゆけり
 道着脱ぎ捨てて飛び込むプールかな
 雷となりひるなかを睦み合ふ
 既に百年の昼寝となりけり